

研究テーマについての覚書

川瀬 博

私は長い間、自治体において仕事を続けてきました。それは、主として都市計画、緑地、環境保全に関係した仕事でした。その間、研究を行い報告書や論文としてまとめてきました。

研究は、大きく分けると2つのテーマになります。それは、「環境政策に関する研究」と「環境倫理に関する研究」です。いずれも、行政実務を契機にして生まれたテーマです。

「環境政策に関する研究」としては、まず生態系の評価手法の開発があり、他には雑木林の管理に関する事実の解明、があります。前者の研究目的は、環境計画や環境アセスメントの質的な向上をめざすものです。環境資源を評価するに際し、大気・土・水・緑に関する評価手法は確立していますが、生態系については未確立でした。そこで、食物連鎖箱法という生態系の評価手法を開発しました。それにより生態系の豊かさの定量化を図ることができるようになりました。このテーマの継承的発展は、自治体の友人の手で進められつつあります。後者の研究目的は、雑木林のより良い管理手法を求めることにあります。そのために雑木林の現地調査や土地の古老への聞き取り調査を行いました。その結果、かつての横浜地域においては、①雑木林の伐期は10年前後であったこと、②環境指標生物であるホタルの生活史と水田・雑木林の手入れが調和していたこと、などが明らかになりました。

次に、「環境倫理に関する研究」としては、ゲシュタルト自然観の構築にかかわるものです。ゲシュタルト自然観とは、自然を人間の精神環境として把握し直し、あまり意識されることもなく私たちの認識や行動を支配しているものの原型を探ることにより、自然と人間のかかわりの大切さについて問題提



起をする考え方です。〈大都市に居住する人間にとってなぜ自然が大切なのか〉という問題意識から考え始めたものです。それは、科学技術至上主義に走りがちな現代文明に警鐘を鳴らすものでもあります。

私の研究方法の特徴は、エコロジイ的考え方に基づいているところにあります。ここでいうエコロジイとは、人間は自然の一部であること、人間は自然との共生を図る必要があること、を意味しています。

現在、新たに関心を寄せている研究テーマに〈公共政策として、まちづくりの場において、環境と福祉の統合をどのように図るのが望ましいか〉というものがあります。

ことの発端は、数年前のゼミナールで森林療法に関する論文を輪読したことです。昨年度には『森林療法の現状と将来的可能性』という卒論を書くゼミ生も現れました。この森林療法を手掛かりに「環境と福祉の統合」について考えて行きたいと思っています。この新たな研究テーマは、自然と人間の共生、生態系の評価、雑木林の管理、精神環境としての自然、森林療法などの延長に存在しているテーマとして考えられるものです。どこまで歩みを進められるのかわかりませんが、今日の我が国の社会を見わたすならば、このようなテーマこそ必要とされているのではないかと考えています。（法学部特任教授）